
烙印ともう一つの闘い

夕霧ありあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烙印ともう一つの闘い

【Nコード】

N0265S

【作者名】

夕霧ありあ

【あらすじ】

クロワッサンさん主催の企画「第一回 戦闘シーンを書こう」参加作品。異端であり異能力を持つ証・烙印をその左手に持つエーベルはある日差出人不明の手紙を受け取ったことをきっかけに、奇妙な倉庫に迷い込む。そこで出会った青年、重永颯が言うには、「そこにいる奴と戦えと聞かされている」とのことだが――？

（前書き）

夕霧ありあです。

この作品はクロワッサンさん主催の企画「第一回 戦闘シーンを書こう」に向けたものとなっております。

戦闘練習も兼ねたものですので、殆どバトルで占められます！

戦闘に入るまでの前置きが長いですが、それでもよろしければどうぞ。

（ここは一体、どこなんだ！？）

エーベル・アルギートはその目で見ている光景がまるで違っていることに、戸惑いを感じずにはいられなかった。

少し前まで、窓から太陽の光が注ぐ、明るい自室でのんびりとした時間を過ごしていた筈だった。

けれども、差出人不明の謎の手紙を手にとった瞬間に、見えているものは目を見張れないほどに歪曲し、そして次に目を開けた時にはここに立っていた。

それにこの場所は自室よりも遥かに広く、そして昼間であるのに薄暗い。

それだけでも、ここは元の世界でないと言うことを知らしめるには十分ではあった。しかし、はつきりと別の世界であると決め手となったのはまばらに見える、ほこりをかぶった「動かぬ機械」達であつたのだった。

こんなものは、エーベルが住む世界にはまずない。

（落ち着いて考える！）

エーベルは頭を抱えて、冷静さを保とうとする。

彼の燃えるように赤い、男性にしては長い髪はくしゃりと揺らいだ。

（やはり、さっきの手紙に何かあつたんじゃないのか……？）

エーベルは、元の世界と今いる世界を繋ぐきつかけとなつた手紙を見つめる。

「兄貴、何か来てるぞ」

そう言つて、疑いもせずにその手紙を渡した妹。

「エーベルつて、よっぽど人望があるのね」

皮肉交じりに、けれども羨ましそうにしていた、妹の、そして自分の友人であるかつて助けた少女。

二人の姿も、どこにもない。

けれども、どこからともなく誰かの足音は響いていた。

それは、静かな倉庫の中では嫌でも目立つ。

（足音は一つ。まずは、正体を確かめる）

エーベルは自身の左手にある、三角形にも似た形の、痣のような「烙印」——エーベルが住む世界での、何らかの人ならざる異能力を持つ者であるという印だ——に思念を込めた。

左手の烙印が光を放ち、さらには光の球が現れた。エーベルは、それを天井に向かって放つ。

「誰だっ!？」

「それはこっちの台詞だな」

エーベルの目に見えたのは、長身の男だった。

整った顔つきをしていたが、どこか飄々とした雰囲気醸し出している。

「とりあえずここが何処だか、教えてくれ」

「俺だって知らねえよ。ただ、ここにいる奴と戦えって聞かされている」

「……お前と戦って勝てば、元の世界に帰れるんだな」

エーベルは切れ長の目で、まっすぐに男を見た。

それは、まるで藁にでもすがるような気持ちだった。

「そういうことだと思っぜえ、多分」

「待て。お前、名は？」

適当に笑う颯を制しようとして、エーベルは冷静に尋ねる。

「颯。重永颯」

「えっと……ハヤテ、か」

日本式の名前の順序に、一瞬エーベルは戸惑った。

「そうそう、その赤い髪のお兄さん、名を聞く前に自分から名乗れって聞かなかったか？」

「……エーベル・アルギートだ」

颯の背は長身な方であるエーベルよりも少し高い。

それが少し上から目線のように見えたのだろう、エーベルは僅かに苛立ちながら名乗った。

「甘いな！ 斬！」

颯は会話をしようと見せかけていただけのようだった。右手に刃物のような切断能力を持たせ、エーベルに切りかかるとする。

重永颯の持つ能力——それは漢字一文字に対応した力を具現化するものだった。

（ザン？ 何だそれは！？ それに不意打ちか！）

異世界からここに迷い込んだエーベルには漢字やその読みや意味など、知る由もない。

エーベルはとりあえず後ろへ跳躍し、攻撃をかわそうとする。

しかし、着地しようとした瞬間、足が何かに当たったようだった。この倉庫の中に点在する古機械。物によっては二メートル以上もあるそれは背後から、エーベルの行く手を阻むかのように、ずっしりとそびえ立つ。

（これ以上はかわせないか……それなら反撃、してやろうじゃないか）

けれども、エーベルはそれに全く怯まない。寧ろ、攻撃に転じるきっかけとみなしていた。

（この手の烙印の光よ、こいつに向かって真っ直ぐ飛べ！）

彼が反撃に向けて、烙印に向けて思念を込める。その直後、左手から光の球が現れた。

瞬間、それは光速にて颯のもとへと向かった——！

（……やったか！？）

パァン！ 拳銃が撃たれたかのような、乾いた音が鳴り響く。

エーベルが放った光は、その音と共に弾け散った。

薄暗い倉庫の中では、微かな光でも眩しく思えるが、弾けた光は目を開けてはいられないほどのものだった。

「しっかしまあ、派っ手な攻撃だなあ〜」

けれども、颯は何事もなかったかのように姿を見せた。それどこ

るか、手をパンパン、と叩いてエーベルの攻撃に感嘆を漏らしている。

（コントロールを間違えたか）

エーベルの光の球は何かにぶつかりと爆発する仕組みになっている。

彼は深く考えずに、きつと当たりどころが悪かったのだろう、と結論づけた。

「それは、ホメ言葉として受け取っていいんだな？」

「勿論さ」

皮肉のこもったエーベルの問いかけに、びしつとした素振りで親指を立てる颯。

「……なら、ありがとよ！」

再び、エーベルの手からは光の球が現れた。

前回の失敗を生かしたのか、飛んだことが目で分かる程の速さだ。

「壁！」

颯は目の前に防壁を貼る。

「後ろがから空きのようだぜ？」

エーベルはもう一つ、光の球を放った。

最初の一つ目は見事に防壁に当たって砕け散った。しかし、二つ目は防壁に向かうと見せかけてシルドの裏側に回り道をするよう思念を込めたのだ。要するに、罠というもの。

再び、光は眩く薄暗がりを照らし出す。

「これで、如何なるもんだ？」

「痛てえ！ よくもやったな！？」

反応から見るとどうやら、二つ目は颯に命中していたらしい。

「……剛」

けれども、どさくさに紛れ、エーベルは颯がそう呟いたのに気がつかなかった。

それは、一瞬の油断。

「くっ……!!」

エーベルは避ける暇もなく、腕力を強化した颯の右ストレートを
まともに食らってしまったのだった。

当たった左腕を抑えて、なんとか持ち直す。

エーベルは次の攻撃が来ると予測して左にステップしたものの、
攻撃に転じる余裕はない。

(次はどこから来るか……)

見落としがないように五感をフル動員して警戒し、エーベルは颯
の様子を見張った。

次に見えたのは微かな口の動き。

(確か、奴は何かを言うことで、攻撃してくるんだったな)

エーベルは颯の能力の特徴を思い出して、即座に巨大な機械の後
ろへ逃げ込む。

何やらよくわからないボタンが点々と並び、機械の壁に背をつけ
るとくすぐつたい。

「逃げたって無駄だ」

振り切ったと思っていたものの、いつの間にか颯はエーベルの前
に姿を現していた。

「どんなカラクリがあるんだよ!？」

エーベルは考えるよりもまずは蹴りを入れてから、トリックを突
き詰めようとする。

「ぐっ……移動の『移』だ。テレポーションといった方がいい
かな」

「そいつは器用なものだな……ん？」

エーベルは腕に力が入って、無作為で後方にある機械のボタンを
押してしまったようだった。

突然、機械のランプが動き出しガタガタと耳障りな音を立てる。

「お前、何をやった!？」

「俺だって知らねえよ!!」

機械とは全く関わりのない生活をしてきたエーベルには、何が何

だか分からない。音が五月蠅いのは仕方のないことだが、気にせず
に戦い続けるしかなかった。

再び、エーベルは光の球を飛ばす。それは握り拳小程の小さいものではあったが、数はどんどん増えていき、まるでマシンガンの連射のように颯へと向かっていった。

「止！　そして煙！」

颯が叫ぶと、それらの球は宙に浮いたままぴたりと動きを止める。さらには煙幕が周りに立ち込めて、ただでさえ悪い視界が悪いのに、エーベルが以前スイッチを押したせいで動き続けている機械さえ見えなくなっていた。

（ちっ、逃げられたか……）

エーベルは煙たさに咳をしつつ、自らの光に頼って颯が逃げた方向を突き止めようとする。左手から放たれた光は、一旦宙に浮いては沈み、恐らく颯がいるであろう方向——右の上空へと向かっていった。それは、背後の震えるような音をたてている機械とは別の機械なのだろう。

（この方向に、賭けてみせる）

煙のせいもあってか、光が消えるのは速かった。しかし、その光は、あたかもエーベルを導いているかのようだった——！

一方でその頃。

「躍！」

颯は脚力を強化して、機械の上へと登る。

（こんな所まで、登る手段を持たないあいっには追いつけまい）

エーベルの能力が光を使うことだけなのだろうと見極めていた颯は、煙が広がりきった地面から彼を探した。

それには、重大な見落としがあるのが気づかずに。

「待ちやがれ！」

声が聞こえたのは地面ではない。

なんと、飛び出した部分の小さなボタンをうまく使って、ロック

クライミングの要領でエーベルは巨大機械の上へと這い上がっていったのだった！

「大した根性じゃないか」

「こんぐらい……余裕だぜ？」

腕は震えつつも、やつとのことで一番上へと手が伸びる。そして勢いをつけて這い上がり、機械の上へと着地した。

「さあ、続きを始めようじゃないか！」

エーベルは続ける。

さらに、左手を光らせて、颯の目の前へと突きつけた。

目も開けていられない程の眩さ。

とつさに目を閉じた颯に、エーベルは距離を詰めて端へと追いつめていく。

「ここに登ったのが間違いだったようだな」

「浮ッ。……それはどうかな」

次にエーベルが気がついたときには、颯は宙に浮いていた。

「宙に浮いたって俺の攻撃は当たる！」

エーベルは光の弾丸を発射。

しかし、颯は浮かんだまま近くのさらに高さのある機械へと移ってそこで着地。弾丸はむなしくもその機械に当たり、爆発した。

爆発の後、機械にはわずかな凹みがあるのを、エーベルは見落としてはいなかった。

（直接奴に当てなくても、このヘンな箱を壊せたら……！）

エーベルは思念を集中させて、当たった時の衝撃が大きくなるように加速度をつけて、鉄が薄い、機械のもろそうな部分へと光の球を放ち続けた。

光が当たると、かなりの衝撃だったのか、巨大だった機械が揺れて、拳句の果てにはひびまで入る。

さらにはジリジリと、機械の中の電子回路が触ったら感電するよな怪しげな音をたてた。

「な、何をする、やめっ！」

慌てて颯は走り幅跳びの如く、衝撃で揺れ続けている機械からエーベルがいる機械へと飛び移ろうとした。

機械が崩れそうな中、助走をつけて、跳躍。

じきにもう一つの機械にたどり着こうとした瞬間に、颯の腹にエーベルの右拳が炸裂した。

重力の勢いと拳の速度の勢いがぶつかり合って、力を相殺。

その結果、颯は真つ逆さまに落下。

エーベルも、衝撃によってかすれた摩擦音を立てながら後ろへと追いやられた。

とっさの判断で、そして一か八かであったことであっても、烙印を持つ、さらには颯のストリートで弱っている左手を使わなかったことが幸いだとエーベルは思った。

「後で面倒だから、おまけにしばらく動けなくさせてやるか」

エーベルは金縛りの嫌な束縛を思い浮かべて、ありったけの精神力を一つの球につきこんだ。

その球は颯にぶつかっても爆発こそしなかったが、つい以前に機械の電子回路がたてたような、ジリツといった音は聞こえてきた。

エーベルは機械の上から飛び降りて、衝撃を受けにくくする体勢で着地。そのまま颯の様子を見に行った。

烙印に精神力をつぎこんだせいで、頭がズキズキと痛み朦朧とする。

（能力を一気に使いすぎたか、帰れたらゆっくり休もう……）

彼はエーベルが壊した機械の下に倒れていたが、どうやら気絶しているだけだった。

「まあ、命拾いして良かったな」

気絶している颯に、エーベルが立ったままそつと言葉を投げかけた。

だが、その時。

「……動けなくしたのは誰だよ」

「ハヤテ、起きてたのかよ!？」

弱々しい表情と口調ではありながらも、颯は目を開けている。

その根性に、エーベルはただ呆れるばかりであった。

「まあな。でも、誰かさんの不意打ちと追撃のせいで動けない。気分的には戦える気もしなくもないが、俺の負けだ」

颯は苦笑いと共に再び目を閉じる。

まるで世界がその一言を聞いたかのように、再び風景はぐにやりと歪み始めた。

「これで、帰れるのか」

「やっぱりお前ってファンタジーな異世界の住人だったのか！？
思ってたとおりだ」

「さあな。でもお前とは違う世界で生きている。それだけは確かだ」

「へえ……そんなもんか」

妙に感動している颯とは対照的に、エーベルは妙にしんみりしていた。

「じゃあな。その減らず口と小ずるさ、なんとかしろよ」

「ああ、お前こそな、エーベル」

軽く手を上げて、エーベルは背中を向けて何処かへと歩き出した。
颯は動かないまま、景色が変わるまで、この、戦うためだけに造られた倉庫の成れの果てを見つめ続けていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265s/>

烙印ともう一つの闘い

2011年3月29日16時11分発行